

日本語文献にあらわれた

エム・ヴェー・ロモノーソフ

今 井 義 夫

は じ め に

この「日本語文献におけるエム・ヴェー・ロモノーソフ」は1966年1月にソビエト科学アカデミー・自然科学・技術史研究所附属ロモノーソフ博物館の館長ヴェ・エリ・チェナカル氏からの依頼で著者が同年8月末までに調査した日本語文献のリストとその解説である。本来この調査報告は1967年度にソビエト科学アカデミー出版所から出版される予定のロモノーソフ研究論文資料集第7巻 (Ломоносов, сборник статей и материалов, том VII, Изд-во АН СССР, М-1967-Л) に収録されることになっているロシア語版のために書かれた日本語原稿である。したがって日本の読者にとっては周知の事実もあり、多少表現を修正した個所もあったが、本文に付した緒言の部分を含めて著者は内容上の変動を避け、できるだけ原形を保つように努めた。

ロシア語版の発表が予定されているにもかかわらず、ここに関係者の同意を得てその日本語原稿を印刷に付することにしたのは、この種の文献調査の例が少いために、日本でのロモノーソフ研究のために有益であろうと考えたことと、調査に当たっている協力して下さった日本の研究者や図書館などへの返礼の意味からでもあった。

なお、この報告のロシア語の題名は次のとおりである。

◇М.В.Ломоносов в японской литературе◇

目 次

緒 言

I. 1906年～1944年の日本語文献にあらわれたエム・ヴェー・ロモノーソフ

II. 1945年～1966年の日本語文献にあらわれたエム・ヴェー・ロモノーソフ

結 語

文 献 目 録

- 凡例 1. 文中の敬称は省略した。
2. 文中の〔 〕内の数字は巻末の文献リストのなかの番号を示す。
3. 文中の《 》内は書名または論文集の標題を示す。
4. 文中の「 」内は論文の標題または書物のなかの独立項目を示す。
5. 文中の“ ”内は他の論文からの引用を示す。

緒 言

隣国ソビエト連邦についての日本国民の認識は長い間の両国の正常な交流がさまざまな政治的理由で妨げられてきたためにまだ極めて不充分である。ロシア国民的文化の先駆者エム・ヴェー・ロモノーソフ (М.В.Ломоносов, 1711~1795年) の名もまだ日本国民の間ではあまり知られていない。

ロモノーソフの名が日本の文献の上にはじめてあらわれたのは20世紀に入ってからである。しかし、われわれはすでに18世紀のはじめ頃からシベリヤやカムチャツカに漂着した幾組かの日本人漂流民がロシアの首都ペテルブルグに送られて、ロモノーソフと関係の深い科学アカデミーやクンストカーメラを訪れて、そこでロシア人に日本語を教えたり、世界で最初の露日辞典の編集にたずさわったことを知っている⁽¹⁾。彼らのうち無事に日本に生還した者が語った話をもとに編さんされた見聞録《北槎聞略》(1794年) や《環海異聞》(1807年) のなかには、今日ロモノーソフ博物館と呼ばれている当時のクンストカーメラやその附近に置かれていた大アカデミー・グローブス⁽²⁾ (世界最初のプラネタリウム兼地球儀) についての記録も見られる。

しかし、このようにして隣国ロシアをはじめ日本をめぐる世界の情勢について自らの目や耳で確かめて帰った邦人にたいして、時の権力者たち(江戸幕府)は彼らと一般国民との接触をさえ許さなかった。なかには大黒屋光太夫のように苦心して故国に帰ったものの外出も禁じられて後半生を空しく幕府の監視の下で終った不幸な人物もあった。自らの政権の安泰をねがうあまり厳しい鎖国政策をとっていた幕府は、日本人の海外渡航を禁じ、外国との交流を制限して、日本国民の目から世界の実情をひた隠しにしていた。このような鎖国政策が長く続いた結果、日本人の対外認識ははなはだしく制約され、時には偏狭な国粹思想と結びついて排外的・独善的な気風を生み出したといわれる⁽³⁾。

明治の開国後も日本の西欧文化摂取は主としてドイツ、イギリス、フランスなどを中心とする西欧諸国からのものが多く、隣国ロシアについては熱心ではなかった。しかもその後満州、朝鮮をめぐる日露両帝国の対立は日露戦争という不幸な戦争となり、

暫時両国の敵対的な関係を招いた。この緊張した関係はその後日本のシベリヤ出兵に見られるように、ソビエト政権の成立後は一層強められた。

とくにソビエト社会主義共和国連邦についての研究や報道は日本では長い間さまざまな制約を受けた。日本国民がロシアやソビエトの政治や文化について知ることの少ない理由は以上のような歴史的事情によるところが多い。

しかし、日本においても、先駆的な人々の努力によってロシアについての理解が次第に国民のなかにひろがっていることも事実である。特に明治時代以来、日本へのロシア文化の紹介には二葉亭四迷（本名・長谷川辰之助1864～1909年）をはじめとするロシア文学の研究者たちの努力に負うところが多い。ロシアの作家たちの文学作品が日本におけるほど多く読まれている国は少いであろうと思われる。ロモノーソフの名も先ずロシア文学の研究者によって日本へ紹介された。

ロシア・ソビエトの文化への日本国民の関心は、この十年來のソ連における宇宙飛行の成功をはじめとする一連の科学上の輝かしい成功によっても強められている。1959年10月27日、宇宙観測ロケット・ルナー3号がもたらした人類史上最初の月の裏側の写真がソ連科学アカデミーから発表されると、日本のあらゆる新聞がその写真と科学アカデミーの発表文を掲載した。⁽⁴⁾その紙面で大部分の日本の読者たちははじめてロシアの科学の先駆者ロモノーソフやボポーフやツィオルコフスキーの名を知ったのである。彼らの名はブルーノやスミスやフンボルトやエジソンやキューリーらの名とともに新発見の月の裏面の地名にとりあげられていた。これらのソ連科学の諸成功は日本の国民の間に長い間根づかせられていたロシアやソビエトについての偏見や無知について反省をうながし、ロシア人のもっている科学的才能や伝統と、またそれを開花させ得た社会主義的体制にたいする新たな関心呼び起させた。

日本においてはロシアやソビエトの文化についての学術的な研究はまだはじまったばかりであるとさえ云える。ロシアの科学や文化の伝統についてもまだわれわれ日本国民は正確な知識を持っていない。おそらくソ連国民も日本にたいして同様であろう。日本の学界でもまだロシアについての研究はもっとも遅れた部門の一つである。それだけに、日本におけるロシア・ソビエト研究者の多くが、この隣国についての正しい知識を交流し、日本とソ連の両国民の理解を深めたいとねがっているのである。

私はロモノーソフ博物館長チェナカール博士の依頼によって、この半年間日本におけるロモノーソフに関係のある文献の調査をしていて以上のような確信を深めた。このささやかな調査報告が日本とソ連との文化交流のためにいくらかでもお役に立つことを希望している。

註) 1. 文献目録〔29〕参照

2. 同 上

3. 「北槎聞略」 亀井高孝編 東京：吉川弘文館 編者解説 pp. 7～9

4. 文献目録〔126〕参照

1. 1906年～1944年

ロモノーソフについての記述がはじめて日本語の文献の上にあらわれたのは私の調査では1906年、日露戦争の終結した年である。日本におけるロシア語とロシア文学の研究の先駆者であり、晩年、1965年にレニングラード大学から名誉学位を贈られた八杉^{きだとし}貞利教授（1886～1966年）の初期の著作《詩宗プーシキン》〔1〕がそれである。この書物は標題が示す通り、プーシキンについての研究であるが、その緒言と最終章「ロシア文学におけるプーシキンの地位」においてそれぞれロシア文学史についての概説があり、その中で、簡単ではあるがロモノーソフについて二頁と数行に及ぶ記述⁽¹⁾が見られるのである。

ロシアという大国との戦勝に酔っていた当時の日本において、この八杉の書物はめずらしく平和主義的であり、日本国民とロシア国民との真の理解を目指していた。この書物の「自序」の中で著者は出版の動機となった同学の友人の言葉を引用している。

「もし日本にして今少し能く露西亞を識り、また露西亞にして今少し早く日本を識ってゐたならば、或はこのたびの悲惨な戦争は免れ得たかも知れぬのである。しかし過去は追ふも及ばぬこと、わが國と露西亞とは戦争の終結と共に今後ますます密接の關係を東洋の舞臺に有するのであるから、わが國民は速かにこの不可思議な隣國の眞情を研究せねばならぬのである。」

八杉はこの友人のすすめに同意し、日本国民の隣國ロシアに対する認識の深化のためにこの書物を出版したと書いている。ロシア文化の研究者としてこれらの先達の見識は二度の大戦争を経た今日一層意義深いものがある。

八杉の書物の中でのロモノーソフに関する記述は次のようなものであった。「ロモノソフ（1711—1765）は新露西亞の偉人物であった。彼は露西亞極北の僻邑の一農夫の児であったが、驚くべき多方面な才能を有した學者であつて、露西亞文化のあらゆる方面に、偉大の手腕を振り、該國學藝の多くは彼のために基礎を置かれ、ことに文學の側では、この人を以て現代露西亞文學の高祖とするのである。彼の文學的事業の最重なのは言語の側にあつて、前代から漸く舊來の寺院語を捨て、現代の國語の上

に文語を創建せんとしつつあった氣運は、彼の時に至って成熟の時期に達し、ロモノソフの露西亞語文典は露西亞國語を明瞭に寺院スラブ語から區別し、殊に多くの露西亞方言中に首府蒙斯哥の語を標準として取った第一の文典である。一口にいへば彼の文典は現代露西亞語文典のはじめであって、この國に於る國文の一途は狭き意味に於てロモノソフの効に歸せねばならぬ。その他露西亞語の上の修辭學及び詩學は皆彼のために造られまた當時佛獨諸國に存在した文學上の多くの形式は悉く露西亞に輸入せられロモノソフ自身もまた多くの文學的述作を試みた。學說歴史の如きものは論無く、秀逸な短詩もあれば悲劇ものもある。たとへ彼の詩作は偽「クラシク」派に屬するもので大なる價值が無いにせよ彼が露西亞文學に新生面を開いたことは、彼をしてその創建者たる名譽を荷はしめた。またロモノソフとプーシキンとの關係について、ロモノソフの露西亞文學の父ならばプーシキンはその母であるとも記している。

このように、ロモノソフの日本への紹介は主としてその言語、文學上の功績についてなされた。そして八杉のこのようなロモノソフ評價は、その後長く日本のロシア文學史研究のなかでひきつがれている。この八杉の著書のロシア文學史についての概観は主としてA・プイピンのロシア文學史その他によるものと思われる。

八杉貞利に次いでロモノソフについて書いているのは、ロシア文學研究家の昇^{のぼり}曙^{しやう}夢^む（1878～1958年）である。昇は八杉の著書の出版された翌年、1907年に《露西亞文學研究》〔2〕を發表したが、その中ではわずか一行だがロモノソフの文學上の業績にふれ、また1916年に日露協約の締結を機に發行された論文集《露國研究》〔3〕のなかで「露國の文學」の項を執筆し、ロモノソフについて数行の記述をしている。また彼は1918年の著作《露國近代文藝思想史》〔4〕の序説のなかでもロモノソフについてわずかに、その多くの抒情詩に於て西歐文明の熱烈なる宣傳者として現われ一面勇ましい社會評論家であつたと書いている。

ロモノソフの文學者としての業績以外に、自然科学者としての面についても書いた最初の日本語の文献は1922年に出版された大泉黒石の《露西亞文學史》の記述である〔5〕。この文學史のなかでのロモノソフの項は次のように書かれている。天才ロモノソフ、一農夫一詩人一星學者一鑛物學者一地質學者一化學者一物理學者一政治經濟學者一であるその天才ロモノソフは實にこうした改造期の中に生存していた數多くの文人、學者の群から一頭抜んでゐた巨匠であつた。ロシア文化の來るべき成熟と發達の期待を一人で背負うていたのは彼であつた。

これにつづいて、約6頁にわたってロモノソフの生涯と業績が紹介されている。しかし、この場合もロモノソフの文學史上の業績が中心となっている。

そのほか、1913年には、英国の新聞記者 Maurice Baring の《The Russian People》が邦訳され〔61〕、1922年にはクロボトキンの英文のロシア文学史が訳されている〔62〕、両書ともロモノーソフについてふれている。

20世紀の第二四半期における日本ではロモノーソフについての紹介は主としてロシア文学史についての概説書のなかの序章の部分で行われたに過ぎないが、その内容にはやや充実したものが見られたし、僅かではあるが自然科学関係の書物の中でもはじめてロモノーソフの名が見られるようになった。また、幾つかの百科辞典や文芸辞典にも小さいながら独立の項目としてロモノーソフがとりあげられたことが注目される。

この時期のロモノーソフに関する紹介で最も充実したものは、ロシア文学研究家片上伸教授^{がみのぶる}（1878～1958年）の《露西亜文學研究》〔6〕（1928年）に収められた論文《露西亜文學概論》の4、「近世的啓蒙時代の文學」のなかのロモノーソフの項目である。ここでは約8頁にわたってロモノーソフの伝記と文学関係の業績を主として紹介しているが、ロモノーソフの活動した時期のロシアの歴史的環境や、彼の活動の多面性やその思想の特色にも適切な解説を加えていて、それまでの日本におけるロモノーソフに関する紹介としては最も充実したものとなっている。

その論文の中で、片上は、おくれたロシアで「文藝復興の精神を體現した人物」としてピョートル大帝とロモノーソフを挙げ、この改革時代に「ピョートル大帝の改革に味方する者の中でさまざまな点から文學方面に重要な意義を有するのはロモノーソフである」と評価している。そして片上は、ロモノーソフが人民的な階層の出身であり、苦学して、ロシアの自然科学・文学・言語学・歴史学・地理学などのあらゆる面にわたる開拓者になったことや、プーシキンが「われらの最初の大學」と呼んだ多面的な大天才であったことを紹介している。また、ロモノーソフの文学上の功績としては、文語の統一、文体の整理を挙げ、彼の「Риторика」「Российская грамматика」「Предисловие о пользе книг церковных в Российском языке」「Письмо о правилах российского стихотворства」を例挙し、それらの内容を簡単に紹介している。そのほかロモノーソフの詩的作品として「Утреннее размышление о божием величестве」と「Ода на день восшествия на престол Елисаветы Петровны」の名をあげている。

片上はロモノーソフが祖国の平和な発展を熱望する愛国者であり、ロシアの要求を充すために学問の必要を信じて、啓蒙の事業に力をつくし、ロシアで最初の大学、モスクワ大学の創立も主として彼の力によるものであると書いている。同時にロモノーソフが18世紀の前半を支配している国家中心、君主絶対、従って宮廷を啓蒙の源泉と

する思想傾向の影響からは脱することが出来なかったと指摘している。このような片上のロモノーソフ紹介は、彼が文学研究家であるために自然科学上の業績についての紹介に欠けていたことを除いては、その理解も深く、網羅的であって、最近にいたるまで日本では最もすぐれた紹介であった。

1939年に当時の日本のロシア文化史研究の集大成ともいべき論文集が米川正夫・馬場哲哉・除村吉太郎の編集によって出版された。八杉先生還暦記念論文集《ロシア文化の研究》がそれであり、わが日本におけるロシア文化研究にとって記念碑的な成果である。この論文集におさめられた八杉貞利の「ロシア文語史概説」〔8〕はわが国のロシア語研究として画期的なものであるがそのⅣ章「第十八、十九世紀（新文語完成の時代）」30～31頁でロモノーソフとトレヂャコフスキーの文語改革上の功績にかなりくわしくふれている。同じ論文集のなかの昇曙夢の「ロシア文藝批評史概論」〔9〕の1、「十八世紀」にもロモノーソフのロシア語改革事業について述べられている。昇はロモノーソフをトレヂャコフスキーと並べてこの時代のロシア文学におけるブルジョア的傾向の代表者とみなしている。

この時期には、またようやく自然科学の研究者たちによって自然科学者としてのロモノーソフの紹介があらわれはじめている。すでに1916年には東京、上野の国立図書館に独逸語の Ostwald's Klassiker の一冊である Physikalisch-Chemische Abhandlungen Lomonossow, W.M. 1741～1752, Aus dem Lateinischen und Russischen mit Anmerkungen, hrsg. Von B. N. Menshutkin und Max Speter, Leipzig. 1910. が購入されているが、1927年東京大学理学部、化学科の《雑誌会》で発行した英文の化学者小伝集〔22〕にはロモノーソフの伝記が25行にわたって掲載された。おそらく上記オストヴァルド叢書のメンシュートキンの訳のロモノーソフ独語版にもとずいて書かれたと思われるこの伝記にはロモノーソフの気体分子運動理論 (кинетическая теория газов) などの先駆的な面がとりあげられ、彼の論文「熱と冷の原因について」(О причине теплоты и холода) の名も紹介されている。しかし、この小冊子の読者は少数の自然科学研究者に限られていたと思われる。

日本の科学史家によって日本語で書かれたロシア自然科学史の最初のモノグラフィーは1942年に八杉竜一（東京工大教授、自然科学史、八杉貞利の子息）によって著わされた《六十年代の露西亜科学——科学史方法論への覚書——》〔33〕である。この論文は1860年代のロシア自然科学史の概観であって、ロシアの科学が、西欧諸国におくられて出発しながら60年代に独自の発展の途をたどり、多くのすぐれた科学者を生みだした経過を明らかにしている。著者はロバチェフスキー (Н. И. Лобачевский)、

セチェーノフ (И. М. Сеченов)、チミリヤーゼフ (К. А. Тимирязев)、メンデレーエフ (Д. М. Менделеев)、およびメチニコフ (И. И. Мечников) などの名をあげて、60年代のロシア科学の発展が当時の社会的思想と結びついていた特質について語っている。この論文のはじめの部分で60年代の前史ともいうべき18世紀のロシアの自然科学史に言及し、主として外国人学者の力に頼った当時のロシアの科学界において、ひとり世界的水準に達していたロモノーソフの苦心について数行の簡単な記述がある。1944年雑誌《月刊ロシヤ》のなかに同じ著者によって書かれた「露西亜科學發達史」〔34〕でもほぼ同じ叙述が見られる。八杉はここで、18世紀を通じて露西亜が世界に誇り得る學者はミハイル・ロモノーソフただ一人であった^クと書き、彼の物理化学および鉱物学への造詣の深さ、物質不滅の法則についての先駆的業績、モスクワ大学創立の歴史における彼の役割などを指摘している。概して八杉はロシアの科学の伝統を無視する西欧の科学史的文献の傾向を批判しつつ、同時にロシア科学の伝統を強調する新らしいソ連の文献の傾向にも客観的に接しようと努めている。そして八杉の結論ではロモノーソフを偉大であるが18世紀のロシア科学史における孤立した存在とみなして、以後のロシア科学の伝統とのつながりを特に認めていない。

八杉の二つのロシア科学史についての論文が書かれたのは日本が太平洋戦争に突入していた時期であり、当時日本国内における平和主義的な思想や進歩的な思想はすでにことごとく弾圧されていて、すべてが戦争の遂行のために動員されていた。しかし、伝統的にソ連を仮想敵国として軍備を強化してきた日本政府はこの太平洋戦争の期間にもソ連に対する政治的、軍事的関心を強めねばならなかった。このような事情のもとで、ソ連についての日本の研究者は多くの場合、政府の要請にもとづいて対ソ連軍事研究に動員されていたが、しかしこのような流れのなかで政府や軍部の関心と違った角度からロシア・ソビエトについての研究を進め、1941年4月の日ソ不可侵条約の成立を期に緩和されたロシア・ソビエト事情についての研究発表の機会を利用して、よりアカデミックな、客観的な形で研究成果を発表する人々がいた。八杉のこの二つの論文もそのような状況のもとで書かれたが、わが国ではじめてのロシア科学史としてその啓蒙的意義は少なくないのである。同じような意味で1943年にロシア史研究家、平岡雅英^{まさひで}が書いた《ソ連の最近科學》も注目される。その第一章「ソ連邦科學の特徴」のなかで極く僅かではあるが彼は帝制ロシアの科学のすぐれた代表者の一人としてロモノーソフの名に触れて、それらの傳統は現在まで持續されてゐる^クと述べている。

そのほか、1942年には安田徳太郎、加藤正の両氏によってダンネマンの《大自然科學史》〔64〕が日本語訳されている。このすぐれた自然科学史は日本の多くの読者に

読まれたが、その中の「熱の本質に関する諸見解」と「微粒子説」の項では、それぞれの問題についてのロモノーソフの先駆的な役割が評価されていて、彼の自然科学史上の卓越した位置が明らかにされた。この訳書の註では主としてメンシェートキンの独訳本によるものと思われるロモノーソフの生涯についての簡単な解説が付けられている。除村吉太郎によって、ベリンスキーの「1846年のロシア文学観」（《Взгляд на русскую литературу 1846 года》）が日本語訳[65]されたのもこの時期である。

日本の百科辞典にロモノーソフの名が独立した項目として扱われたのは1932年初版の平凡社の大百科辞典[99]が最初であろう。さらに、1937年には富山房の国民百科大辞典[100]、中央公論社の世界文藝大辞典[101]などにロモノーソフについての独立した項目が設けられ、それぞれ数行から十数行の解説が行われている。これらの辞典は広く学校、図書館などに備えられており、一般国民がロモノーソフについて知る機会を提供した。それらの項目はいずれもロシア文学の研究者によるもので、主としてロモノーソフの生涯と文学的業績についての簡単な解説であるが、そのうち、八杉貞利の執筆した世界文藝大辞典[101]の第六巻の「ロモノーソフ」の項と第七巻「ロシア文学史」の項でのロモノーソフはもっともすぐれていて、その後のこの種の叙述の基準となっている。この辞典の第六巻の「ロモノーソフ」の項には小さいながらロモノーソフの肖像画が収められている。ロモノーソフの肖像が日本の文献に印刷されたのは私の調べた限りでは、これが最初のものである。

因みに、ロモノーソフの肖像画としてこれに次ぐものは1943年に出版されたエリスベルグの《ロシア文学史》[66]の日本語訳の口絵に掲げられている一頁大のロモノーソフの肖像画の複製である。その註に Deininger 筆とあるこの肖像は18世紀末 X. Г. Шульц の原画から М. Шуре́йер が製版した有名な肖像画をさらに模刻したものと思われる。

Ⅱ 1945年～1966年

1945年、太平洋戦争の終了は世界の大勢から盲目にされて、ひたすら『聖戦』の遂行に追いやられていた日本国民にとって新たな『開国』の時期とさえ言える。従来の軍国主義的、国粹主義的な思想統制に代って、日本の民主化の名において（ポツダム宣言）進められた占領行政のもとで、日本の伝統的な検閲制度や治安立法が一応とり除かれた。日本国民の自らの力でかちとった自由ではなく、敗戦を契機とした占領下の改革であったために、いろいろな制約が存続していたが、天皇の神格化が否定

され、新しい日本国憲法が公布された1946年頃から、言論・出版研究の自由も大幅に認められた。日本国民は世界の実情を知りたがっていたが、この頃にはアメリカをはじめ、ソ連や中国についても日本国民の関心は急速にたかまり、諸外国の歴史や文化についての多くの解説書、研究書が出はじめた。しかし、1951年のサンフランシスコ対日講和条約が、ソ連や中国などの共産圏諸国（社会主義諸国）を除いてとり結ばれ、日米安全保障条約の調印が同時に行われたという事態が示すように、日本の国際社会における地位はかなり一面的な規制をうけた。一時息をひそめていた日本国内の伝統的な国粋思想や反共思想が復活され、反ソ的な宣伝活動が公然と行われるようになったのもこの頃からである。

戦後、日本の大学や学会では部分的にロシア・ソビエト研究がとりあげられるようになったが戦前からの伝統をもつ幾つかの大学のロシア文学科を除いては、まだその講座や研究者の数も少ない。戦後約20年の間に、日本において出版されたロシア・ソビエト関係の各種のパンフレットや翻訳や啓蒙的な概説書の数はかなりの量に達したが、それらのうちでもロモノーソフについて言及しているものは多くない。とくに日本人研究者によるロモノーソフをめぐるモノグラフィーは1966年に至るまでまだ僅かに三・四点を数えるに過ぎない。

戦後の日本の学者のなかで、ロモノーソフについての紹介の先鞭をつけ、その後も近代自然科学史関係の論文のなかでロモノーソフの先駆的役割についての評価を試み、日本におけるロモノーソフの紹介・普及のために一貫した努力を続けているのは、日本科学史学会会員・東京工業大学教授田中実である。

1949年2月、雑誌《思想》に発表された田中実の論文《ミハイル・ワシリェヴィッチ・ロモノーソフ — その生涯と思想 —》〔35〕は日本の科学史家が書いたロモノーソフのモノグラフィーとしては、戦後最初のものであった。約11頁のこの小さな評伝の冒頭で田中は次のように記している。

「ロモノーソフのことはわが国ではあまり知られていない。また彼について知るべき資料もわが国にはとぼしい。原典にいたっては、メンシェートキンがドイツ語に翻訳し、オストワルド科学古典叢書におさめた物理、化学に関する論文集、Physikalisch-Chemische Abhandlungen M. W. Lomonosow (Ostwald's Klassiker Nr. 178) 以外に見あたらない。……

この小論は筆者がわずかに閲覧しえた簡単な資料にもとづいて、ロモノーソフの業績と思想をピョートル政革後のロシア社会を背景として考察し、ロモノーソフ伝の欠除を補おうとするものにすぎない。」

田中のこの論文の特色は、メンシュトキンによるドイツ語訳のロモノーソフの労作とソ連における新しい雑誌論文や啓蒙的な伝記などを利用して、ロモノーソフの時代の歴史的環境や彼の事業について概説し、18世紀のロシアが生み出したロシアの科学・文化の伝統の創始者、百科全書的な大学者の全貌を日本の読者に示したことにある。また、従来の日本におけるロモノーソフについての評価にくらべて、田中のこの論文でのロモノーソフ評価は、最近のソ連の研究者たちの評価をとり入れて、彼をロシアにおける自然科学的唯物論と革命的民主的哲学の源流として位置づけている。田中の論文でのもう一つの特色はロモノーソフの自然科学と技術の面での業績の紹介に詳しいことである。彼の生きた時代と伝記を概説した後、田中は、ロモノーソフの本領は文学的活動よりは、むしろ自然研究にあったことを指摘し、自然科学上のロモノーソフの功績について多くの解説をしている。すなわち、ロモノーソフは自然科学をクリスチャン・ヴォルフに学び、その初期にはライプニッツの影響をうけたが、ヘーコン、ガリレイ、ガッサンディ、デカルト、ニュートン、ロックなどの著作に精通し、十八世紀思想の主流たる機械的唯物論を自己の自然研究の方法とするに至った。彼の科学思想にたいして、とくに強く影響したのはデカルトとニュートンであるとし、さらに彼の原子論、物質およびエネルギー恒存の定式化、熱の機械論的解釈、気体の分子運動論的説明、光および電気の波動的解釈など、一連の先駆的予言を例挙し、これらがいずれもロモノーソフの自然観にもとづいて導き出されたと指摘している。

さらに田中は、ロモノーソフがモザイク技術や各種の測定器、観測器械の発明や地理学や鉱山学・冶金学の上での改良、発明などを行ったことを挙げている。またロモノーソフの文学と言語に関する事業についても言及し、それらが、あえて人民的とは云えないまでも祖國的であった。加うるにロモノーソフはこれらの文学的事業において、自然科学的合理性を貫徹したと記している。

田中教授がこの論文のなかで引用しているロモノーソフについての外国文献はメンシュートキンの独訳本以外に、ソ連のヴェー・ヴェー・ダニレフスキー (В. В. Данилевский)、ヴェー・ゲー・クズネツォフ (В. Г. Кузнецов)、エス・アー・ポゴジン (С. А. Погодин) などの啓蒙的著作5種を含んでいる。

田中のこの論文は小さいながらロモノーソフについての紹介としては日本では画期的なものであった。そして、この論文は戦後の日本で発表されたロモノーソフ研究の最初の作品であるばかりでなく、田中自身にとってもその後のロモノーソフ紹介の出発点をなしている。

1940年代後半のロモノーソフに言及した自然科学関係の文献としてはそのほか、八

杉竜一の小著《ロシアの科学者》(1949年) [37] と八杉竜一編の論文集《ソヴェートの科学者》(1949年) に収められた諸論文 [38] [39] [40]、および中村政雄著《ソヴィエト科学概論》(1949年) [36] がある。そのうち八杉竜一の小著は著者の戦時中からのロシア科学史研究を概説的にまとめたもので、ロモノーソフについての記述も少なく、内容的に変化はない。八杉編の論文集の中ではソビエトの物理学についての玉木英彦と化学についての田中実の論文、ロシア自然科学発達史に関する八杉竜一の論文がそれぞれその序言的部分でロモノーソフにふれている。中村の著書は現代ソビエト科学とアカデミーの機構と運営についての紹介であるが、ソビエト科学の前身としてロシアにおける科学アカデミーの歴史をとりあげ、その中で、ロモノーソフが「ロシアの科学」を創り出すために当時のペテルブルグ科学アカデミーの反動的なドイツ派とたたかい、ロシア人科学者の育成のためにモスクワ大学の創立に努力したいきさつを書いている。この書物では戦後のソビエトの史家の見解が積極的にとり入れられ、ロモノーソフをロシア科学の伝統の創始者としてとくに当時のドイツ人学者との彼のたたかいを強調している。同時に、著者はソ連史家の著作のなかで戦時中の反ナチス・キャンペーンの影響によって、創設期のペテルブルグ・科学アカデミーにおける一連のドイツ人学者たちがロシアの科学の発展のために果たした功績を不当に無視する傾向が一時あらわれたとして、批判的な意見も付している。

1952年に出版された科学史研究家・岡邦雄の《自然科学史概論》[42] も、ロモノーソフをロシア科学の偉大な創始者としてのみならず、近代自然科学史の上で、ラヴォアジエに先立って質量保存の原理を確立した大科学者として高く評価した記述を含んでいる。この自然科学史概論は唯物史観にもとづいて原始時代から近代までの自然科学の発展を概観した注目すべき通史であるが、岡はその「ラヴォアジエ」の項で「先駆者ロモノソフ」の見出しを付して冒頭に次のように書いている。

「フロジストン説を完膚なく克服し、かつ質量恒存の原理を確立して、近代化学をその精神的星雲状態から成形せしめ、化学の研究をこの時代に最も必要な装備たらしめた者は、普通にラヴォアジエだとされている。しかし実はそれに先んじて質量保存の原理を樹立し、ランフォードやデーヴィーに殆んど一世紀を先駆して熱素説の迷妄から科学を解放し、エネルギー保存の原理にまで到達した偉大な先駆者がいた。それはロシア人であるために西ヨーロッパ及びアメリカの科学史から殆んど全く抹殺されて来たロモノーソフである。……」

岡のこのような叙述は、先に《思想》に載った田中の前記論文より一層積極的なロモノーソフ評価を含み、当時^{うまがみよしとろう}馬上義太郎によって訳されたアー・フェルスマン (A.

Ферсуман) 教授監修の『科学とその創造者』《Рассказы о науке и её творцах. М. 1946》) [73] 所収の第八章のベー・ステパーノフ (Б. Степанов) のロモノーソフ評価に負うものと思われる。この訳書はロモノーソフに関する部分が約20頁におよび、具体的にロモノーソフの自然科学上の論文や実験を紹介して、ラヴォアジエに対する彼の先行性を強調し、西欧の科学史家がロモノーソフの功績を無視していることの不当さをとくに批判している。

しかし、日本の自然科学史研究者のなかでは、ロモノーソフを知る者は必ずしも多くはなく、ましてロモノーソフがラヴォアジエに先んじて質量保存の法則を定式化したという説に積極的な同意を示す者はまだ少ないようである。自然科学史家・原光雄は1959年にその著書《化学を築いた人々》[44] の中で、ロモノーソフがボイルの有名な実験(金属灰化実験)を再検討して、その誤りを指摘した事実を一応認めながらも、同時にそのような事実にもとづいて、*「最近…ロモノーソフこそが質量不変の法則の最初の提案者だと主張する人々があるが、これは妥当を欠く見解である。個別的事実の発見と一般的法則の宣言とは判然と区別すべきものなのである」*と述べて、質量不変法則の定式化とロモノーソフを直接結びつけることに反対意見を述べている。しかし、原のこの反対論には、ロモノーソフが1748年7月5日付でオイラーに宛てた手紙や、1760年の論文《Рассуждение о твердости и жидкости тел》のなかでロモノーソフが試みている質量保存の法則についての定式化の件については一言もふれられていないのである。

1958年の田中実の論文《ミハイル・ワシリエヴィッチ・ロモノソフ》[48]は原光雄の反対論が無視しているロモノーソフのこの質量保存法則の定式化の試みについてメンシェートキンの独訳論文を引用しつつ原の見解に対する反批判を展開している。田中はロモノーソフが質量保存の法則の最初の提案者か否かの問題は単に発展時期の前後だけに関する「priority」の問題でなく、この法則の定式化は必ず元素概念の確立を前提しなくてはならないのか、それとも科学的な元素概念の確立以前に(むしろそれへむかう段階として)法則が可能(または有効)であったかということにあると述べて、ロモノーソフとラヴォアジエとはただ元素概念が確立されていたか否かの点で異なるだけであり問題はこの法則の成立の可能性をどちらの側に見るかというよりも内容的な問題であると指摘する。そして、ロモノーソフのラヴォアジエに対する先行性についての主張は「最近」のものではなくすでにメンシェートキンが以前から明らかにしている事実であり、独語や英語に訳された書物にも発表されていると反論している。

この田中の論文の発表された雑誌の口絵には、ロモノーソフの有名な肖像画の一つ（Ломоносов, на заднем плане, в окне, видна одна из построек Усть-Рудицкой Фабрики, Портрет маслом работы Г.Г. Преннера, 1755г.）の複製が掲げられ、簡単な伝記的解説が付いている。

その後も田中実は、ロモノーソフの微粒子論や質量不変法則についての見解を繰り返し返えし自己の自然科学史関係の論文の上で論じている〔49〕〔51〕〔52〕。日本語の論文以外に彼はドイツ語で書いた近代化学史と原子論に関する二つの論文のなかでもロモノーソフの果たした役割について言及している。その一つは1963年に東独の国際科学史学会で発表したものである〔53〕〔54〕。このほか田中は専門的な学術論文以外に学校の教師や生徒向けの自然科学関係の雑誌や書物のなかでロモノーソフについて書いている〔47〕〔55〕。また1963年9月20日の夜のNHKのテレビ放送の教育番組で「近代化学の土台」と題して放送し、この時にボイルの実験結果の誤りを正したロモノーソフの実験についても語り、画面にロモノーソフの肖像を映し出した〔128〕。このように田中の啓蒙的活動がロモノーソフの名を日本の国民の間に広げるために果している役割は大きい。

文学関係では第二次大戦後、黒田辰男（早大教授、ロシア文学）、和久利誓一（東京外国語大学教授）、昇曙夢（ロシア文学研究家）、木村彰一（東京大学教授・ロシア文学）、金子幸彦（一橋大学教授・ロシア文学）などが、それぞれロシア文学史関係の書物のなかでロモノーソフについて概説的にふれている〔10〕〔15〕〔18〕〔19〕〔24〕。しかし、昇曙夢がその晩年の大著《ロシア・ソビエト文学史》〔18〕のなかで、かなり詳しく書いている以外はすべて簡単な叙述にとどまり、その意味では、ロシア文学研究者の戦後のロモノーソフ研究は印刷されたものを見る限りでは戦前の八杉、昇、片上の水準からあまり進んでいないように思われる。しかし1959年に除村ヤエによってロモノーソフの頌詩の一つがはじめて邦訳され印刷されたことは注目される〔88〕。

日本におけるロシア史研究家たちの著作のなかにもロモノーソフの名は出てきている。岩間徹（東京女子大教授、ロシア史）や鳥山成人（北海道大学、スラヴ研究所教授）、阿部重雄（東京農工大学教授、ロシア史）が書いたロシア史関係の書物・論文〔16〕〔17〕〔21〕〔23〕がそれである。そのうち阿部のピョートル大帝についての研究はロモノーソフの時代のロシアの歴史について詳しいが、いずれもロモノーソフ自身についての叙述は僅かであり、内容的にも文学関係の場合と大差ない。

社会思想史研究者の仕事としては、1958年に渋谷一郎（明治学院大学・ロシア社会

思想史)によって訳されたラジーシチェフ (А. Радищев) の《ペテルブルグからモスクワへの旅》〔87〕はロモノーソフ研究にとっても注目すべきものであった。周知のように、ロシアにおける革命的民主主義の先駆者とみなされているラジーシチェフのこの作品の最終章はロモノーソフについての頌詩から成っており、ロモノーソフとラジーシチェフとの思想的なつながりを考察するためにも貴重な文献である。なおこの訳書の序文に大塚金之助 (一橋大学教授・社会経済思想史) と金子幸彦、が書いた文章は、日本におけるロシアの古典的作品の翻訳・研究の意義と困難さについて言及している。

ロモノーソフの研究に限らず、一般に古いロシアの思想家たちについての研究は日本では伝統が浅い。大塚金之助は戦時中軍国主義的な日本政府の圧力によって教壇を追われ、研究の自由を奪われながらも人類の解放思想史上の先駆者について不断の研究を続けてきた日本では数少ない社会思想史研究家である。敗戦後の民主的改革の過程で大学に復帰した彼は教壇で広く西欧近代の社会経済思想史を講義したが、ロシア社会思想史にも関心が深く、各種の文献を集め、自ら「イワン・ボソシコフについて (О Иване Посошкове)」(1958年《一橋大学創立八十周年記念論文集 上巻所収》)を書いている。彼が編集した社会思想史小辞典〔114〕ではロシア部門は金子幸彦が協力し、若いロシア社会思想史研究家たちによって分担執筆されたロモノーソフ、ラヂーシチェフ、ゲルツェン、ベリンスキー、チエルヌィシエフスキー、ドブロリユーボフ、プレハーノフなどの項目が収録された。いずれも小さな項目だがロモノーソフの項目では39行にわたって彼の生涯・思想・著作が紹介されている。

大塚金之助の大学における近世社会経済思想史講義においてもロモノーソフの名が紹介されている。彼の私的な講義用文献目録《Lecture on the History of Modern Social and Economic Thought, 1961—62 By Prof. Kinnosuke Otsuka, A Book-list for Undergraduate Students. Part II : 18th century (Oct. 9, 1961)》の第25頁にはロモノーソフに関する大塚の私蔵しているロシア語、ドイツ語、フランス語、英語の文献が数冊示されている。大塚と金子の指導のもとで一橋大学では幾人かのロシア社会思想史の研究者たちが養成された。

戦後日本で数多く出版された社会思想史関係の出版物のなかでロシア社会思想史をとり入れたものはほとんどなかった。しかし、1962年に高島善哉 (一橋大学教授、社会思想史) らによって出版された《社会思想史概論》〔26〕はロモノーソフ以来のロシア社会思想史を含んだものとして注目される。しかし、この書物のなかではロモノーソフを西欧自然科学思想のロシアへの導入者として評価するだけで、彼の思想がそ

の後のロシアの社会思想や自然科学の発達におよぼした独自の多面的な影響はとり上げられていない。

この時期にロモノーソフの社会思想史について考察した論文としては雑誌《ソヴェト教育科学》1963年No.10に載ったロシア史研究会会員、今井義夫の研究ノート「ロシアにおける国民意識の形成と啓蒙思想——社会思想史的展望——」〔27〕を挙げることができる。そのなかの「ロモノーソフにおける国民意識」の項では彼が18世紀半ばのロシアにおいて階級的な対立よりも国民的な統一と発展という面を重視し、農奴制について明確な反対意見を示さず、国民の文化的な向上を啓蒙君主の努力に期待した歴史的な限界性を指摘している。

ロモノーソフとロシアの教育思想史の問題についてふれているものとしては1950年に日本人の書いたロシアの教育史の最初の書物として勝田昌二の小冊子《帝制ロシア教育史》〔11〕が文部省の監修で出版された。この概説の序章の部分で僅かにロモノーソフの名が《ロシア・アカデミアのロシア人としての最初の会員》《モスクワ大学を創立した》科学者、文学者、教育者として紹介されている。しかし、その後、日本の教育研究者によるロモノーソフ研究の文献は見られない。

ロモノーソフの哲学・社会思想・教育思想の日本における紹介としては戦後日本語に訳されたソ連の文献に依るところが多い。ソビエト科学アカデミー哲学研究所編の哲学小辞典第三版は戦後いち早く日本語に訳されて出版されたが〔68〕、そのなかでロモノーソフについての項目は僅か数行にすぎなかった。1956年にその第四版が訳されたが〔84〕、ロモノーソフの項はいちじるしく増訂された。1954年にはヴェー・プロコフィエフ (В. Прокофьев) の《Атеизм революционных демократов》が鹿島保夫の訳で出版され〔79〕、1955年には同じ著者の《Великие русские мыслители в борьбе против идеализма и религии, 1952.》が《ソヴェト科学思想史》と題して、亀井健三によって邦訳されている〔82〕。そのいずれにおいてもロモノーソフはロシアにおける無神論的・唯物論思想の先駆者として大きくとりあげられ、その思想の特質が解説されている。出隆、寺沢恒信、川内唯彦の監訳で長期にわたって出版されたソビエト科学アカデミー哲学研究所編の《История философии》の邦訳《世界哲学史》の第二巻(1959年)〔89〕のなかに収められている一つの章「ロモノーソフの唯物論、自然科学における新しい思想の発展のうえでのロモノーソフのはたした役割」は概説的な叙述とはいえ日本語訳されたこの種のものとしてはもっとも詳細ですぐれた内容である。日本語に訳されたソビエトの教育学・教育史関係の書物〔78〕〔80〕や教育学辞典〔95〕はロモノーソフに関する貴重な解説を含んでい

る。

日本の辞典、百科事典などにロモノーソフの名が数多く見られるようになったのも戦後の特色である。ソ連における科学の発達についての日本国民の関心がたかまったことを反映してか、一流の自然科学の辞典にソビエト科学に関する項目が増しているが、1950年頃から数種の自然科学や化学の辞典にロモノーソフの項目が設けられた〔104〕〔106〕〔113〕〔119〕。文学辞典や百科事典のなかでもロモノーソフの項目を置いているものは数種に達している〔115〕〔116〕〔118〕〔121〕〔122〕〔123〕〔124〕〔125〕。しかし日本の哲学事典のなかでロモノーソフを独立した項目としてとりあげているのはまだ一種類〔108〕だけである。

1961年はロモノーソフの生誕250年祭であった。この記念すべき年にソ連では各種の記念行事が行われ、ロモノーソフに関する新しい著作集や研究書が多数出版された。そしてそれらの文献の一部が日本にも輸入されたが彼に関心をもつ一部の個人や研究機関に極めて *at random* に購入された。次第に改善されたとはいえ概してわれわれ日本人がソ連の文献を手に入れることは、西欧諸国やアメリカから書物を購入する場合に比べて極めて不便で、あてにならないことが多かった。1965年に東京を中心とする主な図書館のロモノーソフ関係の文献の購入状況を調査した結果、私はそのことを痛感した。（工学院大学研究論叢第4号所収のロモノーソフに関する拙稿のなかの『M. B. ロモノーソフの研究文献について』——モノグラフィーとその所在——を参照されたい）

生誕250年祭に当ってロモノーソフの生誕を記念する行事は残念なことに日本ではなになに一つ行われなかったようである。彼を記念する文章としてはただ一つ1961年11月20日の日本共産党中央機関紙《アカハタ》の文化欄に、ロシア文学研究家・除村吉太郎（早稲田大学教授）による記念の文章が掲載されただけであった〔127〕。

その記事の冒頭には次のように書かれている。◇世界平和評議会は毎年、物故した世界の著名文化人の顕彰をよびかけている。ことしの十一人の顕彰者のうち、きょう20日はロシアの科学者であり、詩人であるミハイル・ワシリエビッチ・ロモノーソフの生誕250年記念日にあたる。

この論文は2000字にみたぬ小さなものであるが、ロモノーソフがモスクワ大学の創立の提唱者であったことや、詩人でありまたロシアの自然科学と人文科学の祖であったことを適切に紹介している。そして、彼が農民の子として生まれ、その後ドイツに留学して西欧の科学を学んだが、盲目的な外国崇拜におちいることなく、愛国者とし

てロシアのアカデミーのドイツ人学者や官僚主義とたたかって科学の研究と普及に努めたこと、唯物論思想の傾向をもち、理論と実践の結びつきを重視して、科学のあらゆる分野にすぐれた業績を残し、各種の技術の開発に貢献したことなどをあげている。また時代的制約のためにロシアの封建制、農奴制的なものを正面から攻撃するにいたらなかったが、農奴制と専制への怒りをもっており、それがラヂーシチェフの思想につながること、などを簡潔に記している。そして論文の結びに除村は次のように書いている。『寡聞な私は日本でロシア文学研究家のうちにも、自然科学者のうちにも、ロモノーソフにとりくんでいる人のあることを聞かない。しかし、かれの事業を研究して今日のソビエト文化、ソビエト科学の驚異的発達の源流をたずねることは一つの重要な仕事ではなからうか。』

1965年はロモノーソフの死後200周年に当る。この年にも日本ではロモノーソフに因^{ちか}んだ特別の行事は見られなかった。しかし、この年にはロモノーソフについての注目すべき論文が二・三発表されて彼の死後200年を記念した。

その一つは、田中実が東京工業大学学報第29号に発表した《近代原子論の形成における化学の役割》〔59〕と題する論文である。これとはほぼ同じテーマの論文を田中はすでに1962年と1963年にそれぞれドイツ語で発表しているが、日本語の論文としてまとめたものとしてはこれが彼の代表的な作品である。この論文の「質量保存則の定式化」の項で彼はかねてから問題にしてきたロモノーソフの質量保存の法則の定式化と原子論的思想についてあらためて科学史上の評価を試みている。

田中はここでもロモノーソフがボイルの実験を追試してその誤りを正したことの意義を強調し、さらにロモノーソフが1741年の《Elementa Chymiae Mathematicae》において展開した原子論を引用して『Lavoisier=Dalton 以前に 化学的原子の概念を最高度にまで発展させた化学者は Lomonosow である』と結論している。

この年に田中はもう一つ、学童向けの科学者伝記集《科学をひらいた人びと》〔57〕のなかで、12人の先駆的な科学者・技術者のなかの一人としてロモノーソフを取りあげている。ロモノーソフのパラグラフには「ロシアに根をおろした科学者」という副題をつけ、約20頁にわたってその生涯と科学や文学の上での目ざましい彼の業績を紹介し、ロモノーソフの肖像や古いモスクワ大学の建物や、ロモノーソフの銅像の建っているモスクワ大学の新校舎の写真などを添えている。学童向けの読物とはいえ、その内容はロモノーソフに関して日本で書かれたものとして、もっともすぐれたものの一つである。しかも、この書物では、科学の先駆者として選ばれた西欧の六人の科

学者（他の六人は日本人）のうち、ロモノーソフをはじめ女流数学者ソーニヤ・コバレフスカヤと化学者メンデレーエフの三人のロシアの科学者をとりあげている。そして彼らが専門の分野ですぐれていただけでなく、いずれも民主的な思想の持主であり、帝制末期のロシアにおいて大学や学問の民主化のためにたたかったことを紹介している。

文学の領域でもこの年になってはじめてロモノーソフに関するモノグラフィーがあらわれた。ロシア文学研究家・東海大学講師・手塚弘保のロモノーソフの伝記と文体論をめぐる研究論文「ロモノーソフに関する若干の言葉」〔28〕がそれである。この手塚の論文は16頁の小論文であるが、ロシア文学研究者が日本で戦後ロモノーソフに発表した最初のモノグラフィーである。この論文の特色の一つはロモノーソフの生誕250周年に当ってソ連で出版されたロモノーソフに関する新らしい研究成果を参照していることと、ロモノーソフの書いた著作自体にもとづいての研究の必要を主張していることである。

論文は(一)と(二)に章分けされ、その(一)では主としてロモノーソフの少年期をとりあげ、後のロモノーソフの多面的才能とその民衆性の根源が彼の少年期の社会的・地理的環境に負っていることを強調し、彼の生地ミシャンスカ村の歴史的な特質について解説を試みている。

(二)では、ロモノーソフの多才な活動を列挙した後、とくに文学理論をとりあげ、彼のいわゆる三文体論（《Теория трех штилей》）について解説している。ロモノーソフの三文体論についてはすでに1927年に片上伸がそのロモノーソフ論で解説し、その後、八杉貞利もそのロシア文体論〔8〕で言及しているが、手塚のこの論文では、より具体的にロモノーソフの著作《Предисловие о пользе книг церковных в российском языке》の該当部分を日本語訳して、それにもとづいてロモノーソフの文体論を論じようと試みたものである。手塚がロモノーソフの著作自体にもとづいて研究する必要があると言ったのは、従来の日本におけるロモノーソフ研究がほとんどロモノーソフについての外国の研究の日本語による紹介であったことにたいする批判を含めた提案として注目される。しかし、手塚自身が論文の最後に記しているように、著者の意図は充分達成されず、未完におわっている。⁽¹⁾

手塚が使用したロモノーソフの著作集は、
М. В. Ломоносов, Сочинения, составление, подготовка текста, вступительная статья и комментарии А. А. Морозова, Гослитиздат. М—1957.

研究文献としては、

Под ред. А. В. Топчива, Н. А. Фигуровского и В. Л. Ченакала, Летопись жизни и творчества М. В. Ломоносова, Изд-во АН СССР. М-1961-Л. В. Г. Кузнецов, Творческий путь Ломоносова, Изд-во АН СССР. М-1961, および、上記 Сочинения の巻頭に付せられた А. А. Морозов 著 の ロモノーソフの生涯と活動についての概説 Михайло Васильевич Ломоносов (Очерк жизни и деятельности) を引用している。

1965年の12月になって、ロモノーソフについてのもう一つのモノグラフィーが東京で発表された。東京の工学院大学研究論叢4号に収められた今井義夫の論文「М. В. Ломоносов и創立期のпетербургская Академия, — Ломоносов после 200 лет к юбилею —」〔36〕がそれである。

ロシアの科学の発展の出発点となったペテルブルグ科学アカデミーの創設をめぐる歴史的経過と、そこで育ち、やがてロシア人科学のために輝かしい成果をあげたロシア国民文化の先駆者ロモノーソフの1740年代までの生活と事業を描いて本文は註をふくめて43頁、その他、日本における各国語のロモノーソフ関係文献39種の書名とその所蔵図書館、所有者名を示す文献目録4頁、ロモノーソフの肖像⁽²⁾、モザイク⁽³⁾、実験室⁽⁴⁾、18世紀半ばのペテルブルグ科学アカデミーとクンストカメラの版画 (Гравюра Г. А. Качалова по рисунку М. И. Махаева 1753г.)、実験室におけるロモノーソフ (Ломоносов с учеником в химической лаборатории, картина А. И. Васильева, 1950г.)、モスクワ大学とロモノーソフ記念像など8点の写真とさらに付録Ⅰとしてソ連におけるロモノーソフの死後200年記念行事を伝え、ソ連科学アカデミー会員エリ・イー・セドーフ (Л. И. Седов) の記念講演「ロモノーソフと自然科学の基礎」(《Ломоносов и основы естествознания》)の日本語訳を収めている。付録のⅡとしてはロモノーソフの生涯と事業に関する年表《Краткая летопись М. В. Ломоносова — его жизнь и основное творчество—》を収め、合計71頁から成っている。

著者はその序論のなかで次のように書いている。

「今日、ソビエト・ロシアの歴史や文化についての研究は従来のような政治的・軍事的見地からする一面的な制約を超えて、世界の学会における共通の科学研究テーマとなりつつある。

しかし、わが国についてみるならば最も近い国の一つであり、国際的にも無視し得ないこの隣国についての学問的研究は、今日なおその研究者の数においても、施設や文献についても必ずしも恵まれているとはいえない。戦後、日本国民の国際的視野は

ひろがり、研究の自由も認められたとはいえ、依然としてそのような面が残っているとすれば、それは戦前からの伝統的な半鎖国的敵視政策と研究の制限がもたらした不幸なゆがみの一つといってよいであろう。学会における盲点が国民の隣国に対する理解の不足や偏見とつながるとすれば、それは一層不幸なことであろう。それだけに今日、ソビエト・ロシアについての学問的な研究の開発は、わが国の学会にとって重要な課題の一つとされねばならない。

私が社会思想史研究の一環として、ロシア国民文化の形成をめぐる研究を志して、ここにその一部として十八世紀初頭のペテルブルグ科学アカデミーの歴史とロシアの生んだ最初の世界的科学者エム・ヴェー・ロモノーソフをとりあげたのも、以上のような課題に私なりにこたえようとするためであった。……と。

この論文の本文の構成を示すために内容目次を示す。

I ピョートル大帝の改革とペテルブルグ科学アカデミーの設立

- 1 ペテルブルグ科学アカデミーの構成と設立過程
- 2 アカデミーの最初の規約と構成
- 3 教授と学生の構成をめぐる

II ロモノーソフの勉学時代とペテルブルグ科学アカデミー

- 1 ロモノーソフの生い立ちと神学校時代
- 2 アカデミー付属大学への編入とドイツ留学
- 3 ロシアへの帰国とアカデミーへの登用

III 1740年代のペテルブルグ科学アカデミーとロモノーソフの活動

- 1 1740年代初頭のロシア社会とアカデミー
- 2 1740年代のアカデミーの改革運動とロモノーソフ
- 3 ロモノーソフの研究活動と化学教授への就任
- 4 ロシアで最初の化学実験室の創設をめぐる

著者の関心は、この論文のなかでピョートル大帝の改革と、その過程で生まれたペテルブルグ科学アカデミーにおけるロモノーソフの活動のなかに18世紀初めのロシアの文化的自立への努力のあとをたどり、ロシア国民文化の源泉を明らかにしようとする点にあった。従ってこの論文では当時のロシアの歴史的状況を中心にロモノーソフの生活した時代を描き、特にロモノーソフのドイツ留学時代の勉強と、帰国後アカデミーにおける反動的な勢力とたたかった姿をとりあげ、ロシアで最初の化学実験室がロモノーソフの苦心によって1748年に創設されるまでの過程を描いている。

今井は、そのあとがきで、ロモノーソフについてもペテルブルグ科学アカデミーに

についてもまだ検討すべき多数の問題が残されていることを認めて、今後さらに長期間のロモノーソフ研究によって、彼の教育活動、歴史観、政治経済論、文学論などについて補うべき必要と、そのために日本における研究者たちの共同研究の必要があることを説いている。

この論文の中で使用されているロモノーソフ関係のロシア語文献はアカデミー版のロモノーソフ全集をはじめ、Б. Д. Греков, М. И. Радовский, А. А. Морозов, Б. Б. Кудрявцев, Е. С. Кулябко, С. И. Вольфович の最近のロモノーソフ研究、および、А. В. Топчиев, Н. А. Фигуровский, В. Л. Ченакал 監修のロモノーソフの年譜 (Летопись, М-1961-Л)、や Г. Е. Павлов 編の «М. В. Ломоносов в воспоминаниях и характеристиках современников, Изд-во АН СССР, 1962 М-Л » などである。

著者のあとがきにも書かれているように、この今井の論文は、これらのソ連における現代の研究家たちの新しい研究成果に負うところが大きく、研究というよりもむしろ資料紹介というにふさわしいと自ら記している。しかも資料を十分に活用して独自の見解を展開するところにまでいたっていないという意味で、ロモノーソフ研究は著者にとってもまだ、着手されたばかりであることを示している。このほか今井は、ロシア語の学習雑誌「現代ロシア語」の1966年9月号〔31〕に「ロシア国民科学の先駆者」と題してロモノーソフとレニングラードのロモノーソフ博物館についての簡単な紹介を書いている。

註

- (1) 手塚弘保氏はロモノーソフの頌詩「Вечернее размышление о божием величестве при случае великого северного сияния」の日本語訳を試みたが、まだ印刷にされていない。
- (2) Гравюра М. Шрейера по рисунки Х. Г. Шульца, конец XVIII в.
- (3) Портрет Петра Первого, Мозаика работы Ломоносова.
- (4) Химическая лаборатория Ломоносова.
- (5) Памятник Ломосову работы Н. В. Томского в МГУ.

あ と が き

1906年に八杉貞利が日本ではじめてロモノーソフを紹介して以来すでに60年を経て、日本の文献にもロモノーソフの名が少なからず見られるようになった。そして最近に

今 井 義 夫

なってようやくロモノーソフへの本格的な研究への志向があらわれはじめた。

ソ連の学会との交流もようやくはじまろうとしている。たとえば1964年に、18世紀の日本漂流民の遺品の調査研究のためにソ連を訪れた日本の歴史学者亀井高孝、言語学者村山七郎はレニングラードの人類学・民族博物館において日本漂流民ゴンザとソーザのデスマスクやその他の日本人漂流民の遺品を確認し、またロモノーソフ博物館を訪れて日本漂流民たちがかつて見た大アカデミー・グローブスを見学した⁽¹⁾。高野明（早稲田大学図書館、日露交渉史研究家）はモスクワの科学アカデミー図書館やレニングラードのロモノーソフ博物館との資料の交換によって、18世紀の日本でつくられたペテルブルグ風景の⁽²⁾漆絵について考察している。これらはいずれも日本とソ連の学者の協力による注目すべき成果であった。

ロモノーソフについての研究もおそらくソ連の学会の協力なしには実現のむずかしいことが多いと思われる。ロモノーソフ歿後200年を機会にロモノーソフ博物館と日本の研究家との資料の交換もはじまった⁽³⁾。今後、このような交流が進むにつれて日本にもロモノーソフに関するすぐれた研究や紹介が増し、両国民の理解を促進することに役立つであろう。日本の歴史学会にとってもそれは少なからぬ意義をもつものと思われる。

註

- (1) 文献目録〔29〕参照
- (2) 高野明、十八世紀の日本工芸品『ペテルブルグ風景』（クンストカメラ旧蔵）日本歴史学会編『日本歴史』昭和41年2月号、第213号 pp.72～81
- (3) ロモノーソフ博物館長チエナカル氏は工学院大学の今井講師にロモノーソフに関する研究資料を送り、また日本におけるロモノーソフ文献の調査を依頼した。1966年9月に今井がレニングラードのロモノーソフ博物館を訪れた際に持参したロモノーソフに関する日本語資料および環海異聞のフォト・コピーを中心に同博物館ではそれらを展示するための陳列ケースの設置準備をすすめている。同年11月には東京工大教授田中実が同博物館を訪問した。（1966年12月追記）

文 献 目 録

〔文学・歴史〕

1. 八杉 貞利 詩宗プーシキン 東京：時代思潮社
1906（明39） ロモノーソフについて pp. 4～5. 6. 7. 235, 250, 255, 257

日本語文献にあらわれたエム・ヴェー・ロモノーソフ

2. 昇 曙夢 露西亜文學研究 東京：隆 文 館
1907（明40） p.21
3. 昇 曙夢 露 國 の 文 学（ゝ露國研究ク 全 東京：同文館 所収）
1916（大5） pp.260～262
4. 昇 曙夢 露國近代文藝思想史 東京：大倉書店
1918（大7） p.42
5. 大泉 黒石、A. C. Кокский、 露西亜文學史 東京：大 鐙 閣
1922（大11） pp.161～166
6. 片上 伸 露西亜文學研究 東京：第 一 書 房
1928（昭3） pp.122～130
7. 米川 正夫 ロシヤ文學思潮 東京：三 省 堂
1932（昭7） p.2
8. 八杉 貞利 ロシア文語史概説
米川正夫、馬場哲哉、除村吉太郎編（八杉先生還暦記念論文集）ロシア文化の研究 pp.29～31 東京：岩 波 書 店
1939（昭14）
9. 昇 曙夢 ロシア文藝批評史概論
米川正夫、馬場哲哉、除村吉太郎編（八杉先生還暦記念論文集）ロシア文化の研究 pp.117～118 東京：岩 波 書 店
1939（昭14）
10. 黒田 辰男 ロ シ ア 文 学 東京：創 藝 社
1950（昭25） pp.87～88
11. 勝田 昌二 帝政ロシア教育史（文部省調査普及局編）
東京：刀江書院 1950（昭25） p.18
12. 古在 由重編 ソヴェト哲学の発展 哲学講座第四卷
東京：青木書店 1952（昭27） pp.10～11
（青木文庫）
13. 金子 幸彦 世界文学全集 古典編 ロシヤ古典編
解説 東京：河出書房 1954（昭29） pp.346～347
14. 黒田 辰男 ロシヤ文学史 東京：門 脇 書 店
1954（昭29） pp.55～56
15. 和久利誓一 ロモノーソフ 除村吉太郎編 ロシヤ文学手帖
東京：創 元 社 1955（昭30） p.48
16. 岩間 徹編 ロ シ ア 史 世界各国史第四卷
東京、山川出版 p.160 肖像1
17. 鳥山 成人 ロ シ ア 史 東京：修 道 社
1956（昭31） p.122
18. 昇 曙夢 ロシヤ・ソヴェト文学史
東京：東 京 堂 1957（昭32） pp.62～64
19. 木村 彰一 ロシア・ソヴェート文学史
東京：中央公論社 1958（昭33） pp.35～38 肖像1

今 井 義 夫

20. 木崎 良平 ロシア・ソヴェトの歴史
東京：雄 山 閣 1959（昭34） p.109
21. 岩間 徹 帝政ロシアの明暗 ―ロシア科学の父―
世界文化史大系 第12巻 東欧・ロシア
東京：角川書店 1959（昭34） pp.225～227
22. 金子 幸彦 ロシ ア 詩 史 世界名詩集大成 12
ロシア篇の解説 東京：平 凡 社 1959（昭34）
p.393
23. 阿部 重雄 ピョートル大帝 ―ロシアのあけぼの（歴史の人間像）
東京：誠文堂新光社 1960（昭35） pp.202、205、207
24. 金子 幸彦 ロシア文学案内 東京：岩 波 書 店
1961（昭36） p.73～74 （岩波文庫別冊）
25. 木村 彰一編 ロシア・ソビエト文学
東京：毎日新聞社 1961（昭36） pp.26～27
肖像1、 （毎日ライブラリー）
26. 高島善哉、水田洋、平田清明 社会思想史概論
東京：岩 波 書 店 1962（昭37） p.148
27. 今井 義夫 ロシアにおける国民意識の形成と啓蒙思想 ―社会思想史的展望―
『ソビエト教育科学』（隔月刊）No.10 1963（昭38） pp.34～36
28. 手塚 弘保 ロマノフソフに関する若干の言葉
『東海大学論叢』―一般研究―（東海大学短期大学部一般研究会）創刊号
1965（昭40） pp.62～78
29. 亀井高孝、村山七郎 日本漂流民とクンストカーメラ
『日本歴史』（日本歴史学会編） No.210 1965（昭40） pp.13～16, 19
30. 今井 義夫 M.B.ロモノフソフと創立期のペテルブルグ科学アカデミー
―ロモノフソフの死後200年記念によせて― 『工学院大学研究論叢』 第4号
1965（昭40） pp.21～92
31. 今井 義夫 ミハイル・ヴァシリエヴィッチ・ロモノフソフ
―ロシア国民科学の先駆者― 『現代ロシア語（語学と文化）』（現代ロシア語
の会編） 1966年 9月号, p.27

〔自然科学〕

32. 東京大学理学部化学科『雑誌會』
Short biographies of the pioneers of chemistry. 1927（昭2） p.60
33. 八杉 竜一 六十年代の露西亜科学 ―科学史方法論への覚書―
『思想』 No.242 1942（昭17）年7月 東京：岩波書店 p.48
34. 八杉 竜一 露西亜科学発達史 『月刊ロシア』
1944（昭19）年2月 p.47
35. 田中 実 ミハイル・ワシリエヴィッチ・ロモノフソフ ―その生涯と思想―
『思想』 No.236 1949（昭24）年2月 東京：岩波書店 pp.33～49

36. 中村 政雄 ソヴィエト科学概観 —科学アカデミイの機構と運営—
拓植秀臣校閲 東京：岩崎書店 1949 (昭24) pp. 7、12、14~15、24
37. 八杉 竜一 ロシアの科学者 東京：弘文堂
1949 (昭24) pp. 7~8 (アテネ文庫)
38. 玉木 英彦 ソヴェートの物理学 p.10
八杉竜一編 ソヴェートの科学 東京：日本評論社 1949 (昭24)
39. 田中 実 ソヴェートの化学 p.139、150
八杉竜一編 ソヴェートの科学 東京：日本評論社 1949 (昭24)
40. 八杉 竜一 自然科学発達略史
八杉竜一編 ソヴェートの科学 東京：日本評論社 pp.200~202
1949 (昭24)
41. 田中 実 自然科学史 —原始社会より産業革命期まで—
東京：弘文堂 1951 (昭26) p.56 (アテネ文庫)
42. 岡 邦雄 自然科学史概論 東京：春秋社
(上) 1952 (昭27) pp.163~164
(下) 1953 (昭28) p.31
43. 湯浅 光朝編 自然科学の名著 東京：毎日新聞社
1954 (昭29) pp.152~153
44. 原 光雄 化学を築いた人々 東京：中央公論社
1954 (昭29) pp.57、67
45. 田中 実 近代化学史 —化学理論の形成— (科学史大系11)
東京：中教出版株式会社 1954 (昭29) p. 5 肖像 1
46. 矢島 祐利 科学思想史入門 (現代選書)
東京：修道社 1956 (昭31) p.109
47. 田中 実 原子の発見 小倉金之助監修
やさしい科学の歴史 3 化学 pp.49~53、肖像 1
東京：築摩書房 1957 (昭32)
48. 田中 実 ミハイル・ワシリエヴィッチ・ロモノソフ
Founders of chemistry (Ⅲ) ♪化学ク 第13巻 第3号
1958 (昭33) 京都：化学同人社 pp.20~22 肖像 1
49. 田中 実 物質不滅の法則 —その成立と適用—
教師のために自然科学講座 3 ♪理科教室ク Vol. 1. No. 3
1958 (昭33) 東京：国土社 p.57
50. 田中 実 自然科学概論 上巻 東京：森北出版 1960 (昭35) p.198
51. 田中 実 物質研究におけるボイルの寄与 日本科学史学会編 科学革命
東京：森北出版 1961 (昭36) p.278
52. 田中 実 教材論 岩波講座
現代教育学 10 自然科学と教育
東京：岩波書店 1962 (昭37) pp.83~84
53. Minoru Tanaka. Ein Beitrag zur Geschichte der Atomistik Über die
Rolle der chemischen Ferschung beim werdegang der Modernen

- Atomistik. Tokyo, The History of Science Society of Japan, 1962.
Reprinted from ≡ Japanese studies in the history of science,
No. 1". M. V. Lomonosov, p. 113, 115.
54. Minoru Tanka. Über die Rolle der chemischen Forschung beim
Werdegang der modernen Atomistik. 1963. Sonderdruck
aus ≡ Naturwissenschaft, Tradition Fortschritt —
Beiheft zur Zeitschrift NTM. pp. 245, 248
55. 田中 実 科学的事実と俗説の間 —質量保存の法則の成立をめぐる—
≡理科の教育 No. 156 1965 (昭40) 年8月 東京: 東洋館出版 p. 32
56. 田中 実 一般化学史 初等化学講座 第12巻 化学の歴史
東京: 朝倉書店 1965 (昭40) pp. 8~9
57. 田中 実 科学をひらいた人びと 東京: 国 土 社 (みつばち図書館)
1965 (昭40) ロモノーソフ —ロシアに根をおろした科学者— pp. 35~54
写真数葉
58. 田中 実 山崎俊雄、相川春喜 発明発見図説 東京: 岩崎書店
1965 (昭40) p. 439、肖像1 (岩崎図説選集)
59. 田中 実 近代原子論の形成における化学の役割 ≡東京工業大学学報 No. 29
1965 (昭40) pp. 63~64, 67
60. ロモノーソフのモザイク ≡今日のソ連邦 No. 4 1966 (昭41) 年2月15日号
東京: ソビエト連邦駐日大使館広報課 pp. 19~21 図版3

〔翻 訳〕

61. 露 國 民 (全) 大日本文明協会 1913 (大2) pp. 305~306, 314
(原書 Maurice Baring. The Russian people.)
62. ク ロ ボ ト キ ン 露西亜文学の理想と現実
馬場孤蝶等訳 東京: アルス 1922 (大11) 第5版 pp. 34~37, 45
(初版、1920)
(原書 P. A Kropotkin. Ideals and realities in Russian literature.
1905.)
63. ク ロ ボ ト キ ン ロシア文学講話 東京: 改造社 (改造文庫上、下)
1938、1939 (昭13、14)
(原書 同上)
他に伊藤整・瀬沼茂樹訳、創元文庫版 (東京) あり
64. ダ ン ネ マ ン 大自然科学史 第5巻
安田徳太郎、加藤 正共訳 東京: 三 省 堂
1942 (昭17) pp. 120~121, 247, 248
(原書 F. Dannemann. Naturwissenschaften in ihrer Entwicklung
4 Bde. 1920—21.)
65. ベ リ ン ス キ ー ベリンスキー選集 (一) 東京: 弘 文 堂
1941 (昭16) (世界文庫)

- (原書 В. Г. Белинский. Взгляды на русскую литературу 1846 года.)
66. エリスベルグ ロシア文学史 宮下義信、小林英夫共訳
東京：筑摩書房 1943 (昭18) pp. 6～8、肖像1
(原書 Alexander, Elisberg. Russische Literatur geschichte in Einzelporträts. München, 1922.)
67. アー・カダシヨーフ ロシア文学概論 坂間重吉訳
東京：紀元社 1944 (昭19) p.10
(原書 不明)
68. ソ同盟科学アカデミア研究所、ユーゲン・ローゼンタル編著
哲学小辞典 及川朝雄訳編 東京：岩崎書店 1946 (昭21)
pp.350～351
(原書 АН СССР. Краткий философский словарь, Под ред. М. Розенталя и П. Юдина. Изд. 3-е. Госполитиздат.)
69. ベリンスキー ベリンスキー選集(二) 除村吉太郎訳
東京：弘文堂 1948 (昭23) p.29 (世界文庫)
(原書 В. Г. Белинский. Взгляды на русскую литературу 1847 г.)
70. ベリンスキー ロシア文学評論集 除村吉太郎訳
東京：岩波書店 第Ⅰ巻 1950 (昭25) pp.105～114
117、(注) 198 第Ⅱ巻 1951 (昭26) pp.27～30 (岩波文庫)
(原書 В. Г. Белинский. Взгляды на русскую литературу 1847 г.)
71. ゲルツェン ロシアにおける革命思想の発達について 金子幸彦訳
東京：岩波書店 1950 (昭25) p.82 (岩波文庫)
(原書 А.И. Герцен. О развитии революционных идей в России.)
72. ポーリング 一般化学 上 関集三等訳 東京：岩波書店
1951 (昭26) pp.48～49
(原書 Linus Pauling. General chemistry. San Francisco. W. H. Freeman & Co., 1947.)
73. ア・フェルスマン監修 科学とその創造者 馬上義太郎訳
第8章 種蒔く(執筆 ベ・ステパノフ)
東京：五月書房 1951 (昭26) pp.121～140、挿絵6
(原書 Под ред. А. Ферсман. Рассказы о науке и её творцах. М., 1946.)
74. シェスタコフ ソ連史 荒川実蔵訳(社会科学全書)
東京：岩崎書店 1952 (昭27) pp.73～74、肖像1
(原書 История СССР. Краткий курс. Учебник для 4-го класса. Под ред. профессора А. В. Шестакова.)

今 井 義 夫

Государственное учебно-педагогическое издательство
Министерства просвещения РСФСР. М., 1949.)

75. マルセル・エーラル ロシア文学史 神西 清訳
東京：白 水 社 1952 (昭27) pp.29~31 (文庫クセジュ)
(原書 Marcelle Ehrhard. La littérature russe. Collection Que
sais-je? No.290.)
76. ゴーリキー ロシア文学史 上巻 山村 房次訳 東京：五月書房
1952 (昭27) p.32, 同 岩波文庫版(上) 東京：岩波書店
1958 (昭33) p.30.
(原書 М.Горький, История русской литературы, 1909.)
77. ヴェルナドスキー ロシ ア 史 上巻 坂本是忠、香山陽平訳
東京：東 和 社 1953 (昭28) pp.153~154
(原書 George Vernadsky. A history of Russia. Yale University
press. 1951.)
78. オゴロドニコフ、シンビリョフ教授共著 ソヴェト教育学 (第二版)
福井研介、勝田昌二、清水邦生訳 東京：青銅社 1953 (昭28)
(第一版) p.60
(原書 Проф. Огородников и Шинбьев. Педагогия. Изд. 2-е,
Учпедгиз. 1950.)
79. ヴェ・プロコフィエフ 社会思想と無神論 鹿島 保夫訳
東京：新興出版社 1954 (昭29) pp.157~158
(原書 В. Прокофьев. Атеизм революционных демократов.)
80. コンスタンチノフ監修 世界教育史 第一巻
勝田昌二、浅川文子、大崎平八郎訳 東京：青銅社 1954 (昭29)
pp.151~192
(原書 Под ред. Н. А. Констанчинов, Очерк истории
педагогии. Изд-во. АН РСФСР. 1952.)
81. ベ・イ・ブルソフ ロシア・リアリズムの系譜
小沢 政雄訳 東京：未来社 1955 (昭30) pp.31.56~57、64、115、157、
165、182、300
(原書 Б. И. Бурсов. Вопросы реализма в эстетиком революционных
демократов. М., Госполитиздат, 1953.)
82. ヴェー・プロコフィエフ ソヴィエト科学思想史 — 観念論および宗教と斗った
偉大な科学者たち — 京都：法律文化社 1955 (昭30) pp.37~59 肖像 1
(原書 В.Прокофьев. Великие русские мыслители в борьбе
против идеализма и религии. 1952.)
83. パ ナ ー ル 歴史における科学 第Ⅱ巻 近代科学の誕生と発展
鎮目恭夫、長野敬訳 東京：みすず書房 1955 (昭30) p.299、365
(原書 J. D. Bernal. Science in history. London, Watts & Co., 1954)

84. ソ同盟科学哲学研究所編 エム・ローゼンタリ, ベー・ユージン監修
 哲学辞典 ソヴェト研究者協会訳 東京: 岩崎書店 1956 (昭31) pp.564~566
 (原書 АН СССР. Институт философии, Краткий философский
 словарь, Под ред. М. Розенталя и П. Юдина. Изд. 4-е.
 Госполитиздат, 1954.)
85. メ イ ソ ン 科学の歴史 矢島 祐利訳 東京: 岩波書店
 1956 (昭31) p.678
 (原書 S. Mason. A history of the science — Main currents of
 scientific thought —. London, 1953.)
86. ス ロ ー ニ ム ロシア文学史 神西 清、池田健太郎訳 東京: 新潮社
 1957 (昭32) pp.31~32
 (原書 Mark Slonim. The epic of Russian literature. New York,
 Oxford University Press, 1950.)
87. ラヂーシチェフ ペテルブルグからモスクワへの旅 渋谷 一郎訳
 東京: 東洋経済新報社 1958 (昭33) pp.302~321 (注) pp.321~326
 (原書 А. Н. Радищев. Путешествие из Петербурга в
 Москву.)
88. ロモノーソフ 『女帝エリザヴェータ・ペトロヴナ陛下の全ロシアの帝位に
 つきたもうた日を記念する頌詩』1747年 除村ヤエ訳 (全訳) 世界名詩集成大
 12, ロシア 東京: 平凡社 1959 (昭34) pp.44~48
 (原書 М. В. Ломоносов. Ода на день Восшествия на Все-
 российский престол ея величество Госдарыни Императорицы
 Елисаветы Петровны, 1747 года.)
89. ソビエト科学アカデミー哲学研究編 世界哲学史 出隆 等監訳
 東京: 商工出版 1959 (昭34) その2 pp.535~562
 (原書 Институт Философии АН СССР. История философии.
 т.1, ч.1. Изд-во. АН СССР.)
90. ソビエト科学アカデミー版 世界史 近代2
 江口朴郎等監訳 東京: 商工出版 1960 (昭35) pp.569~571
 (原書 АН СССР. Всемирная история, т. V, М., Соцгиз, 1958.)
91. ビョーリシキン他 初等物理学 1 力と相互作用 豊田 博慈訳
 東京: 東京図書 1961 (昭36) pp.2~3
 (原書 А. В. Пёрышкин, В. В. Крауклис. Курс физики,
 Часть первая. М., Учпедгиз, 1961.)
92. ビョーリシキン 初等物理学 3 物質と分子運動 豊田 博慈訳
 東京: 東京図書 1961 (昭36) p.2~3
 (原書 А. В. Пёрышкин. Курс физики, Часть вторая, М.,
 Учпедгиз, 1961.)
93. スミルノフ 初等化学 1. 基礎概念と法則 大竹三郎訳編
 東京: 東京図書 1962 (昭37) p.53

今 井 義 夫

- (原書 А. Д. Смирнов, Г. И. Шелинский. Химия. Учебник для седьмого класса. М., Учпедгиз, 1962.)
94. マ サ リ ッ ク ロシヤ思想史 1 佐々木俊次、行田良雄訳
東京：みすず書房 1962 (昭37) pp.57、63、95、169~170、188
(原書 Th. G. Masaryk. Russland und Europa. Studien über die geistigen Strömungen in Russland. Verlag Diedrichs, Jena, 1913.)
95. ソビエト教育科学アカデミヤ版 ソビエト教育科学辞典
ソビエト教育学会編訳 東京：明治図書 1963 (昭38)
ロモノーソフ — p.771
(原書 Академия педагогических наук РСФСР. Педагогический словарь. 1960.)
96. ユ・イ・コリヤーキン 原子の伝記 小林 茂樹訳 東京：東京図書
1963 (昭38) pp.29~33
(原書 Ю. И. Корякин. Биография атома. Рассказы об открытии и использовании атомной энергии, Государственное издательство литературы в области атомной науки и техники, М. 1961.)
97. フォーブス、ディクステルホイス 科学と技術の歴史 II 広重 徹等訳
東京：みすず書房 1964 (昭39) pp.280、322 (みすず叢書)
(原書 R. J. Forbes & E. J. Dijksterhuis. A history of science and technology. II The eighteenth and nineteenth centuries. England, Penguin Books, 1963.)
98. アガフオーシン 物質の化学構造 大竹三郎訳編 東京：東京図書
1965 (昭40) p. 9
(原書 П. Н. Агафшин. Теория химического строения веществ А. М. Бутлерова. М., Учпедгиз 1961.)

〔辞 典〕

99. 大百科事典 第十三巻 東京：平凡社 1932 (昭7)
[ロモノーソフ] pp.1235~1236 (執筆、馬場)
100. 国民百科大辞典 第十二巻 東京：富山房 1937 (昭12)
[ロモノーソフ] pp.943~944
101. 世界文藝大辞典 東京：中央公論社 1937 (昭12)
[ロモノーソフ] 第六巻 p.691、(執筆、八杉貞利) 肖像一葉
[ロモノーソフ時代] 第七巻 p.630、(執筆、八杉貞利) 挿絵一葉
102. 世界思想辞典 東京：河出書房 1950 (昭25)
[ロモノーソフ] p.665
103. 湯浅 光朝 解説科学文化史年表
東京：中央公論社 1950 (昭25) p.58
104. KAGAKU no ZITEN 東京：岩波書店 1950 p.1210

日本語文献にあらわれたエム・ヴェー・ロモノーソフ

105. 加茂儀一、田中 実、山崎俊雄、 図解科学技術史事典 東京：弘文堂
1952 (昭27) pp.94、107、147
106. 井上敏、小谷正雄、玉虫文一、富山小太郎 岩波理化学辞典 増訂版
東京：岩波書店 1953 (昭28)
〔ロモノーソフ〕 p.1469
107. 世界人名百科辞典 荒 正人、村上政之編 東京：河出書房 1953 (昭28)
〔ロモノーソフ〕 p.820
108. 哲 学 辞 典 林 達夫 等編 東京：平凡社 1954 (昭29)
〔ロモノーソフ〕 p.1286
109. 外国人名事典 東京：平凡社 1954 (昭29)
〔ロモノーソフ〕 p.1023
110. 大 人 名 事 典 外国編Ⅱ 東京：平凡社 1954 (昭29)
〔ロモノーソフ〕 p.1022
111. 世界歴史事典 第20巻 東京：平凡社 1954 (昭29)
〔ロモノーソフ〕 pp.212~213 (執筆、岩間 徹)
112. 人文科学史年表 速水敬二、古川哲史、佐藤俊夫編 東京：小山書店
1955 (昭30) p.191
113. 化学小事典 田中 実、大沼正則編 東京：福音館 1956 (昭31)
p. 7
114. 岩波小辞典 社会思想 大塚金之助編 東京：岩波書店
1956 (昭31)
〔ロモノーソフ〕 pp.208~209
115. 岩波小辞典 西洋文学 桑原 武夫編
東京：岩波書店 1956 (昭31)
〔ロモノーソフ〕 p.196
116. 岩波西洋人名辞典 篠田 英雄編 東京：岩波書店 1956 (昭31)
〔ロモノーソフ〕 p.1748
117. 解説世界文学史年表 東京：中央公論社 1956 (昭31)
〔ロシア、古典主義—トレジャコーフスキイ、ロモノーソフ〕
p.270、(執筆、木村彰一) 肖像 1
118. 世界大百科辞典 第30巻 東京：平凡社 1958 (昭33)
〔ロモノーソフ〕 p.501 (執筆、木村 浩)
119. 化学大辞典 (9) 東京：共立出版 1962 (昭37)
〔ロモノーソフ〕 p.997、(執筆、奥田典夫) 肖像 1
120. ソヴィエト年報 1962年版 内閣官房内閣調査室編
東京：日刊労働通信社 1962 (昭37)
〔社会・文化〕社会 ロモノーソフ誕生二百五十年祭、pp.240~241
121. 国民百科事典 第7巻 東京：平凡社 1962 (昭37)
〔ロモノーソフ〕 p.605 (執筆、山下)
122. 日本百科大辞典 第13巻 東京：小学館 1964 (昭39)
〔ロモノーソフ〕 P.528 (執筆、木村 浩)

今 井 義 夫

123. マスコミに出る人名知識（「現代用語の基礎知識」の姉妹編）
東京：自由国民社 1964（昭39）
〔ロモノーソフ〕 p.152
124. 現代用語の基礎知識 東京：自由国民社 1965（昭40）
（工学）科学賞 その他 「ロモノーソフ賞」 p.785
125. 新潮世界文学小辞典 伊藤 整 等編 東京：新潮社 1966（昭41）
〔ロモノーソフ〕 p.1088（執筆、木村彰一）

〔新聞・テレビ〕

126. 朝日新聞 1959（昭34）年10月27日 特別号外
「人類がはじめて見る『月の裏側』ソ連で写真を発表」その注、「ロモノーソフ
は十八世紀のロシアの科学者」
127. 除村吉太郎 ミハイル・ロモノーソフ —その生誕250年にさいして—
日本共産党中央機関紙「アカハタ」1961年11月20日（月）第3813号(6)
128. 田中 実 科学の歴史 —近代科学の土台—工業化と科学技術の進歩(2)
（NHKTV放送用台本）（ガリ版刷） p.15
放送 1963（昭38）年9月20日 午後9.00～9.30
129. 毎日新聞 1965（昭40）年2月21日号
ソ連科学アカデミー 世界の団体 (6)

付記 この文献調査に当っては多くの研究機関や研究者の御協力を得たが、ここにその
主なる機関名と氏名を記してお礼に代えさせていただきたい。

東京工大教授・田中実氏、同 八杉竜一氏、東海大学講師・手塚弘保氏、国立国会
図書館・庄野新氏、早稲田大学付属図書館・高野明氏、一橋大学図書館・大橋渉氏、
工学院大学図書館、東京外国語大図書館、日ソ図書館、大阪外大助教授・國本哲男氏
（本学講師）